蓋し、天地の中心なり。白民の南、建木の下、日が中すれば影は無く、声を呼べど響きは無い。

-『山海経』

維嶋津

――はツ、はツ、はツ、はツ。

走狗のように荒い息が反響する。

ひとりの少女が、ワンピースをひるがえらせて走っていた。

沸騰した水面のような地面に、足をとられながら。

悪夢のような空間だった。

ういくつもの空中回廊が、 しきものを成して連なっていた。空には雲一つないが、道は薄暗い。 いる。それらは天地も左右もあべこべに無秩序に折り重なって、五階建てほどの集合住宅らいる。それらは天地も左右もあべこべに無秩序に折り重なって、五階建てほどの集合を 少女が走る道以外の空間はすべて、 日を遮っているからだ。 泡沫のような形をした奇妙な住居で埋め尽くされ 頭上で無数に絡み合 7

濁っていない瞳。淀んだ空気をこばむような姿は、この街にあってあきらかに異質だった。 耳のピアスが、 の残る顔がその下から覗く。 長い影が足元をかすめ、 わずかに射した陽光を受けて、きらりと青く光る。 少女はぎくりと振り返る。 しみのない肌。 乾いていない唇。 つやのある黒髪がなびき、 仕立ての良い服に、 まだ幼さ 退廃に

刹那。

しゅうっと空気を裂く音とともに、少女の足元に、錆びの浮いたナイフが突き刺さった。

一歩後ずさった彼女は、足を取られてしりもちをつじゅ。

面を蹴ると再び身をひるがえして走り出した。 こでうごめく影が見下ろし、 頭上から嘲笑が降り注いだ。 距離をじりじりと詰めてゆく。 必死に恐怖の叫びを押し殺す少女を、空中回廊のそこかし 老人の静脈のような路地を、右へ、左へ。 少女はきっとそれを睨み、

かれこれ半時間ほど、追跡は続いていた。

ずなのに、 地を訪れる者への警句を、 もはや少女は、 次の瞬間には先ほど通った道が下方にある。 足を踏み入れた瞬間から役に立たなくなっている。『四隅天地に標無し』。この土 まったく違う場所を通っていることもあった。 自分がいまどこを走っているのかわからなかった。 彼女はいま身をもって味わっていた。 ぐるぐると同じ場所をめぐっていたは ねじれ傾いた住宅群はゆらゆら 隧道が空を塞いだかと思 事前に手に入れた地

とうごめい ているようにも見え、 平衡感覚がだんだんとおかしくなってくる。

で脅嚇の声をあびせながら、 は一向に追いつく気配がない。 をなぶるように。 足がもつれ、 息があがった。 一定の距離を保ったまま、 走る速度は半分以下に落ち込んでいた。 時には路地裏の闇から白刃をのぞかせ、 どこまでも追いかけてきた。彼女 だが、 また時には四 追っ手たち

だが、その時間にも終わりがやってくる。

視界が唐突にひらけた。

突き刺すような光が少女の網膜を焼く。

「……ッ!」

目が慣れると同時に飛び込んできた情景に、彼女は立ち止まる。

嘘のように滑らかになり、下りの傾斜を描きながら、ある一点でぷっつりと途絶えて 抜け出た道の先は、 狭い帯状の広場となっていた。足元の地面は、 先ほどまでの凹凸が

笑い声に急かされ、 彼女はよろよろと夢遊病者のように、 そこへと歩かざるを得ない。

道が、消えていた。

ある一転から指数関数的に傾斜をきつくした地面は、そのまま下方へと落ち込んでいる。

……はるか足元に広がる、雲海の底まで。

有下、 同髪 15.自分 10.

香港新界葵青區・自律建築式超高層住宅群。

通称、『摩天神樹』。

地上六百メートルの高さを持つ超々高層マンション、 その先端に違法居住者たちが築い

た頂屋集落の辺縁に、少女は追い詰められていた。

吹きあがってくる凍てついた気流が、 少女の額に浮かぶ汗を吹き散らす。 所在なく左右

に首をめぐらせても、 同じような断崖が視界の彼方へと消えていくばかり。

ようやく知る。

自分がここへ誘い込まれたことを。

「満足か? お嬢ちゃん」

振り返る路地の奥。ゆっくりとした足音が近づいてくる。

「観光ツアーとしちゃ、悪くなかっただろ」

頂までを覆う渦のような紋様だけが、 イースー 禿頭に紅の刺青をした、長身の男だった。 ツ が、 油を塗ったように鈍く輝く。 毒々し 全身にぴ 肌も、 いほどに赤い。 服も、 っちりと張り付い 浅黒かった。 右手に握られた 鏢が、 ただその顔から頭 た合成皮革のボデ 陽光を

受けて鈍い光を放つ。

無表情のまま、 男は切り込みのような目をわずかに細め、 少女を値踏みする。

「足元に気をつけろよ……。 うつかり落ちて、 煎餅みたいになられちゃ、 困る」

彼の背後の住宅には、 配下のならず者たちがびっしりと張り付いていた。サディスティ

ックな視線が、追い詰められた少女に集中する。

もはや急ぐ必要もない男は、 道で知り合いにでも出くわしたような気軽さで、 少女に向

かって歩み寄った。

「怖いことはない。 少しばかり、 茶でも飲みながら世間話をするだけだ。 な あ

あとずさる少女の踵は、すでに踏む地面を失っている。それでもなお、彼女は顔を上げ、

近づく凶賊の顔を、正面から見据える。

それを見て――能面のようだった男の表情が、変わった。

薄い唇が開き、頬が耳元まで吊り上がる。

い いね、 悪くないぜ。 そういうの。 その調子で頑張れ。 まだ泣くなよ? 攫って、 連れ

て帰って、 それからたっぷり、 『もう許してください』 って言わせてやるからよ」

男の手が伸び、身をすくませる少女の体に触れようとし---

「ふあああああああああああああ

バカでかいあくびの声が、あたりに響いた。

反射的に少女は、声の方向へ視線を向けた。

少女の眼前にそびえ立つ、 無数の住宅。 ならず者たちが鈴なりになった一角から少し離

れたバルコニーに、声の主はいた。

わずかに緑がかった蓬髪と、 つぎはぎだらけの襤褸を風にはためかせ、 朽ちか けたサ

フボードを枕にしたひとりの女が、 寝惚けた眼をこちらに向けていた。

 \vec{v} い陽気だなア、嬢ちゃん。下界のガスも昇ってこねえし、散歩にはちょうどい V

そう言って、 雑に包帯を巻いた右腕を、 ひらひらと少女に向かって振ってくる。

振り返った禿頭の男が、いまいましげに呟いた。

「ラガ……!」

「よーオ、 虯 ラガと呼ばれたその蓬髪の少女は、 男の名を呼び返した。

「ずいぶんな大騒ぎじゃねえか、ええ?」

「お前にゃ関係ねえだろ」虯の声から温度が消える。

「ここは俺のシマだ。 お前にどうのこうの言われる筋合い 、はねえ」

で追い詰めた少女へ下卑た視線を向けていた男たちが、 「へえ?」軽く笑って、 ラガはサーフボ ードを小脇に抱え、 それを見ていっせいに息を吞む。 地面に飛び降り る。 先ほどま

「怯むんじゃねえ!」

虯の鋭い一喝が、浮足立つ配下を制した。

無表情を保つ彼の額にはだが血管が浮き、 瞳に凶暴な光が浮かんでい

なかったぜ。 「なぁ、 ラガ。 薄汚ェ婊子がいまさらになってヒ 珍しいじやねえか。 お雨がそんなヒュー ーロー気取りか? マニズムにあふれた御仁とは思わ それともあれか。

ナニに飽きたからメスガキの味見でもしようってか」

「あぁーあ、これだから頭にカビの生えたクソヤクザはさァ」売り言葉に買 (V) 言葉、 笑う

ラガの口から、鋭い犬歯がぎらりとのぞいた。

「男のナニだの女のアレだの、 いま西暦何年だと思っ てんだ? 人工子宮生まれ \mathcal{O}

訳知り顔に上っ面ぶっこいたところで薄ら寒ィんだよ笨蛋

そして、そのまま好奇の目を少女に向けて、

なアあんた、 大陸の生まれじゃねえな。 もしかして日本人? 『ハジメマシテ、 ボクド ラ

エモンデス』……あってる? ガキの頃によく見てたんだよあのアニメ」

きなりの日本語にきょとんとした表情の少女に向けて軽口を続け

「にしても嬢ちゃ んは運がい いなあ。 蚪に目ェつけられてここまで五体満足でい られるよ

そ者なんて初めて見たぜ。新記録だ」

ピクリと、虯の肩が動く。

ド変態ときたもんだ。 「知ってるか? コイツは生粋のサディストでよ。 こいつのシマに紛れ込んだ余所者は、 女の皮を生きたまま剥ぐのが大好きな は五分ともたずに捕まっちま

V) いか嬢ちゃん、 五分だぞ? あんたはいったい、 何分逃げ回った?」

「二度は言わねえぞ、ラガ」虯が低い声で唸った。「失せろ」

ラガは意に介さない。 「なあ、 姒。 ず ٧١ ぶん行儀がよくなったもんだな?」 バ カで サ

を器用に回しながら続ける。 「先月に外国人ジャーナリストだかなんだかの

殺戮影片を撮ったときには、 あんなにハ イだったじゃねえか。 お前こそ、

ズム に目覚めたか ? それとも そいつを殺しちゃいけない 理由でもあるのか?」

「シャアッ!」

ガの目線がそれたと見るや、 気合一閃、 銀色の光を散らして、 虯は少女の腕をつかんで思い切りよく引き寄せようとする。 虯の投げた刀がラガへと襲い掛かる。 それを避けたラ

がっ、ぎぃん!

重たい金属音をたてて虯の腕を勢いよく弾き飛ばした。 だがその目論見はかなわない、お返しとばかりに投げつけられたラガのサーフボー -ドが、

大きく態勢を崩した虯が再び身を起こしたときには、 -いつの間にか、 離れたラガの腕の中に収まっていた。 眼前にいたはずの少女の姿はすで

「ラアアアガア!」

血走った眼を見開き、 0 いに怒声を上げる虯。 「邪魔を! するんじゃ ねえツ!」

「ギャハハハハハハ!」

彼女は哄笑する。ざんばら髪が風にあおられ、宙を舞う。

まかそうが、このあたしが、 「甘ェんだよ虯。 どれだけボンクラどもの目を盗もうが、 この竜胆ラガが出てきた時点で、 どれだけ周到にカネの なんもかんもぜ エ 包 エ エ VI をご エん

ぶご破算なんだっての。いい加減わかれよ、

なア?」

「殺す!

それが合図だった。

鈴なりの配下たちが、 雪崩を打ってラガと少女のふたりに襲いか かる

だが、その光景を見てなお、ラガは楽しげな笑みを絶やさない。

まるですべてが望み通りとでも言いたげに。

そして彼女は、 いましがた助けた少女のほうを振り返り 包帯だらけの片手を下して、

そっと地面に掌をつけた。

「同郷のよしみだ。助けてやるよ、嬢ちゃん

息を吹き込んだような朱色の脈動が渦を巻く。 の下からでもそれとわかるほど発光しながら、 ラガのざんばら髪が、帯電したかのようにぶわりと逆立った。 それは頭頂部から、 奔りまわり、 接地した手のひらから黒色の 暗緑色の表面で、 顔へ、 首へ、

地面へ向かって、勢いよく流れ込む。

地面が、どくんと脈を打った。

同時に、 先陣を切った太った男が、 柳葉刀を彼女の首に向け水平に振り抜き

手応えなく、刃を空に泳がせる。

ハ !

嘲笑うラガの身長が、 縮んでい

その足元が、 地面の下 へと沈んでいた。

壁に消え去った。 の視界を塞ぐ。 しゃあと重たい水音がして、 返す刀で垂直に刃を振り下ろされるその一瞬前に、 そして、 男が一瞬あとに視界を取り戻したとき、 さっきまで固形だったはずの地面が、 彼女は地面ごと足を蹴り上げた。 今度こそ、 黒いしぶきとなって男 ラガの姿は完

少女と共に。

残された地面で、 ラガの全身に浮かんでいたものと同じ、 赤い 渦模様がみるみる広が

侵食していく。

同時に、 耳をつんざく悲鳴。

地面が沼と化し、 男たちの体をずぶずぶと沈めてい

足元を刺せ!」

まで沈みながらも、 喧騒の中 心で、 **虯が唾を飛ばして怒鳴り散らしてい** た。 彼は歯を食い しばり、 自らも腰

刃を地面に向かって手あたり次第に突き立てる。

その背後から、 しぶきが上がった。

音がして壁が砕ける……かと思いきや、 だ虯は水切りのように地面を二跳ねしたあと、 下にいた男たちが恐怖の叫びをあげて逃げ惑った。 ろに溶けてゆく。 虯が振りかえる間もなく、 支えを失ったアパートがにぶいきしみをあげながらゆっくりと傾き、 斧のような一蹴が、 その瓦礫さえもまた、 頭から住宅の一棟にぶちあたった。 虯の背を横なぎに蹴り飛ばす。 水飴の ようになってどろど 吹き飛ん 硬質の 真

らず者たちを吞み込む。 倒壊するアパ 形を失って流れてゆく。 トは、 なすすべもなく流されていく群衆。 そのまま空中で重油のような液体と化し、 別のアパ 粘性の奔流と化してな が同じように溶

壁面に人間たちを埋め込みながら。 を描きながら引き絞られるように情報へと伸びはじめた。 だが、 濁流が広場の縁から垂れ落ちそうになった瞬間、 それは急激に向きを変え、 デコレー ショ ンのように、 螺旋

あ 0 は やが 0 はっ は 本の巨大な塔と化したその頂点で、 ア。 楽しいなぁ、 おい」 ふたつの影がずるりと立ち上がる。

まとった液体をぼたぼたとこぼしながら、 ラガがばさりと髪をかき上げる。 その左脇に

ていた。 はサーフボ ドが、 右脇には、 陸にあがった魚のようにパクパクと口を動かす少女を抱え

「へへへ、びっくりしたか嬢ちゃん ? このあたしにかか りやあ、 チンピラの百人や二百

人程度、ざっとこんなもん――」

びぎぃん!

言い終わらぬうちに、 閃光のような投げナイフの一撃が、 ラガの右腕を根元から貫く。

「う、おッ!」

ラガは態勢を崩しながらもとっさに左手のサ ・フボ ードを差し出 ī 支えを失って落下

しかけた少女を受け止めた。

視線をやったその先 -まだ形を保つ一棟のアパ ートの屋上に立つ虯が、 荒 い息をつき

ながら叫んだ。

「女……置いてけ……!」

彼の左手はあらぬ方向に折れ曲がり、 関節部分からはひしゃげた金属質の フレ ムが \mathcal{O}

ぞいている。それでも目に宿った戦意には、 いささかの衰えもない。

「いいねぇ!」

ラガは再び犬歯をむき出して笑った、

「今日はずいぶんと根性見せんじゃねえかよ、ハゲ!」

「しゃあアッツ!」

い声とともに残った右手から放たれる、 幾条もの光。 レ -ザーとも見紛うほどの必殺

の刃はしかし、 ラガの眼前に立ち上がった黒色の液体によって阻まれる。

その飛沫の隙間から覗く瞳が、赤い光を放ち。

「でも、 こっちはもう飽きちまったからよー ーここはい ったん、 お開きといこうや」

失った腕を意にも介さず、 彼女はサーフボ ド に飛び乗ると、 残った左の掌を、 乱雑に

地面へと押し付ける。

どくん。

再び渦を巻くパルス。 それはみるみる地面を侵食し、 たったいまできたばかりの塔を、

黒い濁流へと変えてゆく。

塔はスラムの外縁から内側へとなだれ込む巨大な波濤となり――

「うおおおおおおお――ッ!」

屋上で雄たけびをあげる虯を吞み込んで、 轟音とともに崩れていく。

がみつく少女が浮かんでいた。 その波頭には、 サ /ーフボ ド 0 上で機嫌よく蓬髪をなびかせるラガと、 彼女に必死でし

** ** **

「……い、よッ、と

さらと細かい粒子になって地面へと落ち、 薄暗い路 地裏の一角にラガが降り立つと、 吸い込まれていった。 意思あるように彼女を運んできた波が、 さら

かと首をめぐらせる。 ひと暴れを終えて落ち着いた彼女は、 とりあえず連れてきた少女を見、 さてどうしたも

そもそもが、 特に深い考えあっての行動というわけでもなかった。

運動がてらちょっとからかってみただけ。 うなのは間違いない 昼寝をしていたら、 が、 たまたま喧嘩相手の虯がらしくないことをしていたから、 それにしたって実際のところはさっぱり見当もつか あの慌てようから考えて、 なにかウラがありそ ない。 寝起きの

気付く。 そこまで考えたところで、 肩口からすっぱり切り落とされてしまった腕を。 ラガはふと、 隣に立つ少女がじっとこちらを見ていることに

「あア、これか? 心配いらねえよ、ほれ」

そう言って彼女は、 肩の切断面を、 手近な壁にぐっと押し付ける。

まゆっくりと、肩を引くと、まるで水から手を抜くように、失ったはずの手が再生される。 残された壁のほうにはぽっかりと穴が開き、 わずかに髪が逆立ち、 押し付けた部分を起点に一瞬だけ、 その向こうでステテコー丁の中年男性が、 壁に渦模様が走った。 そのま

「おおっと、失礼」

目を見開いてこちらを見ていた。

男性が何かを叫ぼうとする直前、地面から壁伝いにせりあがった流れがその穴を塞いだ。

目を丸くする少女に向かい、ラガは得意げな笑みを見せる。

 $\bar{z}_{\mathcal{O}}$ マンションを構成する微細自律建築端子 ボ クセルって知ってるか ? あたし \mathcal{O}

腕や髪は、そいつの制御を奪い取ってできてんのさ」

の肥溜めに何をしにきたのかっつー 見たとこ日本生まれの、 な無数の黒い鱗に覆われたようなその腕で、 どうやらお育ちもよさそうなお嬢ちゃんが、 のを聞きたい んだが……えーと、 ラガはピースをしてみせた。 とりあえず中国語わ こんな空

かるか? キャンユースピークチャイニーズ?」

『摩天龍姐』——」

口を開いた少女が、 以外にも流暢な公用語を話したことに面食らいながら、ラガは思わい外にも流暢な公用語を話したことに面食らいながら、ラガは思わ

ず少女を見た。

「竜胆ラガ……聞いたとおりの腕と性格なんですね、本当に」

強い意志を宿した瞳が、ラガを正面から見返していた。

強欲なあなたに。依頼したいことがあるの-「わたしは折口みやこ。あなたに会いにここに来ました。この街で、一番強くて、自由で、 -わたしの親に、手紙を届けてください」

「まさか、 お前に客人たアの……」

その上にひびの入った茶杯を逆向きにかぶせると、 えへと滑らせた。 けっけっけっと笑いながら、白髪の老人が、白磁の聞香杯の縁まで薄褐色の液体を注ぐ。 くるりと天地を器用に返して、

「またえらく、 名が知れたもんだな、 ラガ?」

「うっせえよ、 ジジイ」

された。 心で伏せられた円筒を持ち上げる。 杯を受けとったラガは渋い顔をして、 湯気とともに立ち上がる香気が、 こぽりと気泡の音がして、 茶杯の縁をおさえつつ、 室内に充満する。 小ぶりの茶杯に液体が満た もう一方の手で、 \mathcal{O} 中

えて』 から、 歪に映していた。 球状の狭い空間に、 食器棚らしきものや流し台、 いる。 斜め頭上から顔を出す暖色光のLEDが、 彼女たちはいた。 鏡やテレビ画面といったものが、 中 央には粗末な円卓が置かれ、 差し向かいにすわる二人の影を、 バラバラな向きで『生 壁の 11 たるところ

「なかなかだろうが? 阿里山から仕入れた天然モノよ。 まずはゆっくりと香りを……」

ラガは一息に茶を飲み干した。

悦に入る老人を無視し、

あアもう、このガキは こい つ仕入れるのにいくらかけたと思っとるんだ」

「隠居老人の道楽に付き合うほど、 こっちはヒマじゃねえんだよ

「道楽じゃなくて、 教養と言え。 わしらのころはこうやって茶を飲むことが……」

がつんと乱暴に茶器をおいたラガがにらむと、老人はやれやれと首を振って嘆息した。

例の子はまだ起きんか?」

ラガは首をすくめる。 「よっぽどお疲れらしいや

「温室育ちにゃ荷が重い環境だろうて……」 そう言って、 老人は感慨深そうな顔をし

 \mathcal{O} 『翼人』 が、 ラガの力をもとめてこんな掃き溜めになア」

その言葉を無言で聞き流しながら、 ラガは考えにふけっていた

区の生まれだが、 ラガに助けを求めたあの少女 ラガのように大陸籍ではない。どころか、 折口みやこは、 その素性を信じるならば、 地上のいかなる国家にも属し 日本行政地

てい

ない

トルの塔、『ネフィリムの指』に住まう住民たちのことである。 その俗称は、 衛星軌道上の人工小惑星から地上に向かって吊り下げられた、 全高3万メ

密裡に不死の研究が進められているとも、 会に介入し、 あらゆる国から独立している。 道速度に乗って移動し、 それは一部の富裕層とその家族たちによる究極のゲーテッド・コミュニティだ。 部の例外を除いたほとんどが、 形式的には大陸の一行政区画という立場ではあるが、 住民たちはオンライン通信や仮想アバターを通じて地上社 惑星間移民の選別が行われているとも言われて 外上 \mathcal{O} 人間と直接関わらない。 実質的には 内部では秘 塔は

「わたし \mathcal{O} 親は、 『指』 内部のラボ職員なんです」

自分に依頼があると言い放った折口みやこは、 そう続けた。

で会うことはあっても、 「わたしは生まれたときからずっと、 本当に会ったことなんて一度もなくて。 地上に預けられてました。 だからー ビデオ通話や、

この塔から、 直接会って手紙を渡したい。

そう、 彼女は繰り返す。

摩天神樹には、 『指』が居住区域にこれほど接近することは禁じられているけれど、 「一か月後……『指』は、このスラムのわずか三十メー 本来は人が誰も住んでいないはずだったから」 トル上空を通過するんです。 このマンション 本来、

りされる。 区域に自動的に部屋が生成・解体される仕組みだ。 その内部は微細自律建築素子で満たされ、 この巨大な塔が実質的な鬼城 政府公認のオンライン不動産購入システムに基づいて空間を売買すると、 城であることは、 売買は部屋単位ではなく、 周知の事実だ。 容積単位で切り売

買し、その仲介手数料によって利益を得る。 方でデベロ 居』とみなされるだけの最低限の設備しか備えておらず、実際にここに住む人間 投資家たちは、 わばこの塔は、 ッパー は、 他の金融商品よりも緩い規制と高い価格変動性によっ 空間を基本単位とした巨大な金融商品だった。 香港政府が販売する国有土地使用権を顧客の購入状況に合わせて売 部屋はただ法律上『住 て利益を得る。 はい ない。

を確保していた。 そして香港政府は、 いまから二十年前、 土地使用権の販売価格の 二〇二〇年代に香港政府公共財政収入の四割を占め コント 口 ルと売買時の税収に よっ て利益

セル』という仕組みがあるからこそだ。 け皿となっ 7 V た土地使用権譲渡に関する収入はいまや八割ちかくとなり、 ている。こうした図式が成立するのも、 建築・改修コストが極端に低い、 肥大する社会保障費の受 『ボク

街を作り上げた違法居住者たちを除いて。 そのため、 摩天神樹の人口は、 ゼロのはずだった。 その構造の制御を奪い 取り、 屋上に

ます。 「政府はきっと、 だから通過を許可した。 の接近する空域で、なおかつ人が住んでいるところは、 『指』との邂逅をニュー だから……このスラムが、 スにして、 摩天神 唯一で最後の接点。 樹の価格を高めたい 他にないんです」 『ネフ んだと思い イリム

「だからって、あたしか?」

いなガキに顎で使われるほど-鋭い目で、ラガは少女をにらむ。「このあたしが誰だか、 って、 おい!」 わか 0 て W \mathcal{O} か? てめえみた

やこが、 噛みつくような口調はしか 急に膝からくずおれ、 Ļ ラガにもたれかかってきたからだ。 最後まで続かなかった。 さっきまで目を見開 V て 11

「おいおいおい、てめえいきなり――」

「お願い

か細い声が、受け止めたラガの胸から聞こえる。

「これが最初で最後のチャンスなの。 うわごとにようにつぶやきながら、 少女は意識を失ったのだった。 お金なら……きっと、 払うから……」

× × ×

「・・・・・それにしても、 天下の 『摩天龍姐』にしちゃあ、 お優しいな、 ラガ?」

二杯目の茶を聞香杯に注ぎながら、老人が言う。

「どんだけ金を持ってようが、ガキひとりにかかずらうお前じゃねえだろう。 い つもなら、

気絶した時点でおっぽりだして終いにするのが相場だろうさ」

再び被せた茶杯の天地を返し、 老人は黙したままのラガ の眼前に置く。

「利用しようにも難しいネタだぜ。『翼人』どもの倫理はわしらとは違う。 身代金をせしめ

ようったって、 そううまく事は運ぶまいよ。 それとも 重ねたか? 自分と」

*を思わせるその瞳に、愉快そうな色が宿った。

「親なしのガキが、貧民窟にひとりきり……お前もそうだったなあ。十五年も前になるか」

「やめとけよ、大鶚」

老人の名を呼び、ラガは不愉快そうに目を細める。 「昔語りと勘繰りはボケの前兆だぜ」

「心配してくれるのか?」「他の病で苦しんで死ねって意味だよ」

言いながら、ラガは顎に手をあてて再び思案する。

「あんたが言うことくらい わかってる ·だが、なアんかひっかかるのさ」

「ほう?」大鶚が眉を上げる。「そりやまたなにが」

わからねえ」

椅子の背もたれにぎしりと身を任せ、 ラガは頭の後ろで掌を組む。 「まだ、 な

「だから待ってる――向こうから答えが来るのを」

答え?」

問い返す大鶚に応じようとしたラガが、 言葉を切ってにやりと笑う。

――みしり。

重い音が、ラガと相対する壁の奥から聞こえた。

それはみるみるうちにたわんでゆき、 ラガのほうへ近づいてくる。

みしみしみしみしみじじじじぎぎぎぎぎぎぎい---

慌ただしく立ち上がり逃げる大鶚を尻目に、 ラガは悠然と立ち上がり、 迫るそれを見つ

めながら、愉快そうに言った。

「遅すぎんだよてめえ」

壁が爆散した。

棚にあった卓が吹き飛び、 無数の破片が散弾のように飛び散る。 それをラガは、 11 つの

まにか持ち出したサーフボードをかざして受け止める。

半ば溶解した壁から現れたのは 剌 全身を白熱させ、 いたるところか ら蒸気をあげ

る禿頭の男だった。失ったはずの片腕はすでに戻り、 どころか背中から追加の腕が二本生

えていた。頭から全身にかけて入った赤い入墨が、蒸気の中で血のようにぬらぬらと光る。

「ラアアアアアアアガアアアアアアアア!」

大鶚! 切り離すぞ!」

叫ぶが早いか、ラガは右手を床に触れさせた。

「待てラガ、おめえ、わしの茶室を――!

その先は言葉にならなかった。

ラガの掌を通じて地面に流れ込んだ制御命令が、居室ユニットの接合部を液状化させる。

ばぎん!

どこかで鈍い音がし、部屋が傾きはじめた。

頭を抱えた大鶚が、悲鳴をあげる。

叩きこんでいた。 だが、 その嘆きがラガに届くことはなかった。一瞬で間合いを詰めた虯が、 空中で一回転したラガが壁に突っ込んだところに間髪を入れず、 ラガに拳を

腕による追撃が残像を引くスピードで降り注ぐ。

「女アどこだ! ラガアアア・」

狂ったような衝撃と叫びが、 半壊する部屋をびりびりと震わせる。

だが。

「じゃかァしぃんだよボケェ!」

一瞬の拳の 間隙に、 虯の脇腹を強烈な蹴りがとらえた。 踏みとどまる虯が再度拳を振

かざそうとする一瞬、 部屋が大きく傾き、 ふたりの上下が逆転する。

「ふんッ」

のほうへ っと音を立てて部屋の調度品すべてが形を失い、 鼻血をまき散らしながら宙を舞うラガが、 その形を、 無数の拳へと変えながら。 髪を逆立たせながら壁に手を当てる。 重力に従って垂れ落ちた。 真下にいる虯 ば しゃ

「拳打っつゥのは、こう、やるんだよ、ボケェ!」

回転しながら落ちてい く部屋の中で、 跳ねまわる無数の拳が虯の体を捉える。 それは部

屋が地面に接地するまで続き、

ばしゃあん!

巨大な水音と共に、 部屋ごとすべてが飛沫となってかき消えた。

……沼と化した地面から、 ほどなくしてふたつの影が身を起こす。

「よーォ、虯。ずいぶんとご執心じゃあねえか。あの小娘によ」

「うるせェ。 てめえにや関係ねえだろう。 邪魔すんじゃねえよ……」

立ち上がったふたりは息ひとつ乱さず、 互いに殺意の視線を交わし合う。

邪魔ならぶっ倒してみろよ。 ま、 百年たっても無理だろうがな」

ラガの軽口に歯ぎしりをする虯だったが -一瞬後、 気を取り直したように首を振り、

その指を口に寄せる。

「今回は、 てめえの気まぐれに付き合ってる暇ァ……ねえんだよ……

スラムに響く指笛の音。

わらわらと、 無数の影がそこかしこから集まってくる。 不意打ちだった先ほどと違い、

向けられる戦意に迷いは見えない。

「それが望みなら、なりふり構わず殺してやるぜ」

「ハ! いいねェ……」

凶暴に笑いかけたラガの膝が――カクリと一瞬抜けた。

「うお? ……っとオ……」

たたらを踏んで態勢を整えるその表情に、 瞬の驚愕が浮かび……笑みが戻った。

「その腕……てめえ、やっぱり……」

「ジャアッ!」

意に介さぬとばかりに、 蚪が間合いを詰めた。 四本の腕にいつのまにか握ら れた柳葉刀

が、バラバラのタイミングで襲い掛かる。 ラガはそれを間一髪で避けながら、 内心で冷や

汗をかいていた 1 つもより、 明らかに速い。 ボクセルに腕で干渉する隙が、 ない。

がっぎいん・

タイミングよく四本の刃を、サーフボードで受け止める。

「ガアアアアアアアアッ!」

四本の腕による膂力は、片手では抑えきれない。 サ ・フボ ドの裏面に両手を添えて歯

を食いしばるラガは、すでに虯の狙いに気付いた。

身動きが、とれない。

すでに遅かった。 固まったままのラガに、 白刃をひらめかせた部下たちが一斉にとびか

かる。

ラガはそれを見ていることしかできなかった。

頭上で交錯する刃が、 スローモーションのように自分のように落ちてくる

「やれやれ」

老人の声が聞こえた。

時間が凝縮されたままの世界で、 梟のような目をした白髪の老人が、 すたすたとこちら

へと歩いてくる。

「これだから、まだまだ未熟だというに」

ぶつくさと文句をいいながら、 大鶚はスロー に動く刃を、 子供から おもちゃを取

るようにひ よいひょいと回収すると、 その事実にすらまだ気づいていないだろう虯の手下

たちを優しく地面へと転がした。

それから呆れたような顔をしてラガに向き合うと、

「これは、人の私室をぶち壊した罰」

そういって、身動きのとれないラガの額を指で弾く。

次の瞬間、時間の流れが戻った。

ラガは首どころか背骨が折れんばかりの勢いでのけぞって吹き飛び、 そのまま十数メ

トル先のアパートの壁へ、派手な音を立ててぶち当たる。

虯の配下たちの怒声は一斉に困惑へと塗り替わり、 ラガを抑えたままの勢い で

った虯は、 一瞬事態をはかりかねたあと-大鶚を見て硬直した。

「ら、老爺……」

「よーオ、虯。家族は息災か?」

気安く片手をあげて挨拶をした大鶚は、

「くっそ、ジジイイイイイイイイ!」

こだまするラガの叫びによって中断される。

「相変わらず、うるっせェガキだの」

一拍遅れて飛来するサーフボードを、 ため息をつきながら片手でとらえる大鶚

:: の、 背後の地面から、 目を血走らせたラガが派手な水音を立てて飛び出し、

りかぶる。

「てめえ、よくもあたしの邪魔おぼフッ」

だが、 彼女は次 の瞬間には地面に伏し、 その頭には大鶚の尻が乗っていた。

「ちったァ静かにしろ。隠居老人ひっぱり出しゃアがって」

「ぐぬぬぬののうぬぬぬねお」

じたばたと尻の下で暴れるラガをいなしつつ、 大鶚は虯へと視線を向ける。

びくりと身を震わせる彼の四本の腕は、 あれだけの戦闘があったあとにも関わらず傷ひ

とつなく、銀色に輝いている。

「なるほど、 その腕……軍の正規品か。 昨日の今日ので手に入るようなシロモノじゃねえ

……それ、どこで手に入れた?」

だが虯は全身を緊張でこわばらせながらも、 唇を噛っ んで答えない。

大鶚の目が鋭くなる。

わしに言えねえようなことがあるってわけか? 坊主」

「勝手に吹きあがってんじゃねえよ、ジジイ」

虯にかわって答えたのは、ラガだった。

「もう、そいつから聞くこたアなにもねえ。だいたい読めたぜ」

「なに?」

大鶚がいぶかしげに問うと同時に、虯が静かな声で笑った。

「もう遅い……。俺の仕事は、終わりだ」

言うが早いか体を白熱させ、脱兎のように逃げ出してゆく。追おうとする大鶚の足元が、

ずぶずぶと沈んだ。

「やめとけよ」とラガ。「どうせもう『縮地』もできねえだろ? でしゃばりやがって」

「ああせんと死んどったろうがお前」

「本蛋、あんなもんお遊びだよ。 もともと向こうにや殺す気もなかったしな」

「なに?」

「家に戻ってみな。 あのガキ、 たぶんもうとっくに攫われてるぜ。 あい つは陽動。 本命は

別。あたしらはまんまとおびきだされたって寸法だ」

そう言ってラガは、地面にうつぶせたまま、ため息をつく。

……ま、ようやく楽しくなってきたな」

深夜。

ひとりの男が、音もたてずに街を歩いていた。

入り組んだスラムの内奥には、 月の光もまた届かない。 だが男は慣れているのか、 道に

迷うことも、 なにかにぶつかることもなく、 すたすたと歩いていく。

やがてたどり着いたのは -スラムの縁。ただし、みやこが追い詰められたところとは

反対側だった。

建物が消えると、強い風と共に、土のにおいが漂う。

そこはひろい菜園だった。 ボクセルで固めた偽物の地面ではない、 本物の土が敷き詰め

られ、芋類や白菜やその他多くの野菜が葉をしげらせている。

もはやさえぎるもののない月光が、 菜園を区切るあぜ道をゆく男の顔を照らす。 大立ち

回りの末、 命じられた陽動を果たした虯 だが、 その顔に明るいものはない。 むしろ、

より強まった緊張が、その表情には見て取れる。

菜園は全体として円形をしており、 その中心部にはまたもう一 口 ŋ 狭 V 広場があった。

見慣れた黒いボクセルではなく、 なめらかな銀色の金属が足元を覆っている。

「来たぞ!」

広場にたどりついた虯は、闇に向かって小声で叫ぶ。

「約束通り、あのガキを攫う手助けはした。だから……」

「こんな面倒な手続きを踏まなければならなかったのは」

闇の奥から響く声が、虯の声をさえぎった。

「そもそも、君の不始末のせいなんだがね」

どこからか耳障りな羽音が聞こえ、 街灯のもないはずの広場を、 強烈な光が照らした。

スーツを着た、 体格のよい男が立っていた。 その周囲には、 強化骨格で武装した兵士た

ちが控え、無表情な目で虯を見据えていた。

「しかしまあ、 嘆かわしいことだよ。 我々が作り上げた偉大な事業を、こういう形でかす

めとっていく輩がいるのだからな」

大きく嘆息した男は、虫でも見るような目つきを虯に注ぐ。

「さらに加えて。 ろくに仕事をこなすことすらできない。 狗のほうがまだ使い道がある」

「仕方ないんだ!」悲痛な叫びが闇に響く。

「あい つは……竜胆ラガは災害みたいなもんなんだ。 巻き込まれたら最後、 なにもかもを

滅茶苦茶にされる……だから」

「まあ、いい」男性はひらひらと手を振って虯を制した。

「君らの間にあるヒエラルキーがどうなの かは知らんが、 結果として、 目的は果たせた。

もはやここにいる必要もあるまい」

男が目くばせをすると、 ひとりの軍人がひとつの箱を捧げもって出てくる。

「約束通り、報酬をくれてやろう」

玉元!

虯の眼が開き、 走り出そうとするのを、 兵士の持つ銃口が制した。 それを見て、 男は意

地悪くあざ笑う。

「しかし、 学のない もの 0 価値観はわからんな。 こんなものの、 どこが家族なのだか」

男が持っていたの は、 ア , クリル 製の容器に箱詰めされた脳だった。

「妹の脳を保存し続ける、 家族思いのマフィア 聞けば先日も、 興味本位で撮影したジ

ナリストを惨殺したそうじゃないか。 こんな、 とっくの昔に死んだ人間のために」

「玉は死んでない」

虯は言う。 「知ってるんだ。脳さえあれば、 人はい つか復活することができる」

心底不愉快そうに、男は顔を歪める。

「それがマフィアの信仰か。愚かしい な。こんな保存状態の悪い 脳を再生するくらいなら、

新しく人間を作ったほうが早かろう。効率の悪い」

「返せよ」虯は懇願する。「返してくれ。頼む」

「やれやれ」男は嘆息すると、その箱を乱雑に宙にほうった。

虯はそれを必死で受け止めると。 それを抱え込んでうずくまった。

「よかった……よかったなあ、おかえり、玉……」

ああ、それから」その様子を意にも介さず、男は言った。

「我々が貸したものは、返してもらうぞ」

瞬間、破裂音と共に、虯の両腕と背中が爆ぜた。

「あがっ! ぐっ!」

突然の激痛にもだえ苦しむ虯。 その意思に反して動かなくなった腕から、 血まみれ の箱

がずるりと地面におちる。

つかと革靴の音を響かせた男が、 その箱に足を乗せて、 虯を見下ろした。

「家族に会いたいなら、 こんなものに執着するより死んだほうが早かろう。

私は、死後の世界など信じていないがね」

虯がうつぶせた地面の底から、ごうん、ごうんと、なにかが上がってくる音が聞こえた。

広場のそこかしこから円筒状のエレベー タが出現し、 虯と男を取り囲んだ。

「ともかくこれで、 われわれは安心してこのスラムを一掃できるというわけだ」

そう言って彼は、薄く笑う。

「こんな薄汚れた街を、 『翼人』に見せるわけにはいか ん。まったく、 あの子供の気まぐれ

さえなければ、もう少しスムーズにことが運んだだろうに」

男の脇をかためていた兵士たちがにわかに慌ただしくなり、あたりに指示が飛び交う。

「まあ、 協力に感謝するよ。 君のおかげで、 われわれの作ったシステムは、 正常な形に戻

る。君は英雄だ。胸を張ってくれ」

「どけよ……」

ん ?

虯は、 男のほうを見てすらいなかった。 「その足、 どかせ……

嘆息して首を振った男は、近くの兵士を呼び止めて言った。

「殺しておけ」

軽くうなずいた兵士が、すぐさま虯に銃口を向ける。だが、虯はそれすら気にも留めず、

ただひたすら、 目の前のアクリル詰め Ó 脳だけを見つめている。

「ああ、玉……汚れてしまって……きれいにしないと……」

兵士の指先が、引き金を引く--

んなこったろうと思ったよ、本蛋」

突如現れた黒い波濤が、虯の前にいる兵士を吞み込んだ。

「な……ッ!」

「待て、なんだ貴様は……うわッ!」

「ひいいッ!」

交錯する悲鳴。 混じる銃声はすぐにくぐもって消え、 K 口 ンの羽音が甲高く響いたと

思えばまた消える。

突如出現した狂乱の意味がわからずうずくまる虯のもとへ―

その女は現れる。

その蓬髪は朱に輝き。

力をふるえば天地が変わる。

その眼に睨まれれば逃げられず。

あらゆる企みも計画も、すべて呑み込まれる。

それは人の形をした災厄。

あるいは、神樹の頂点で気ままに吠える龍。

『摩天龍姐』。

よーオ、虯。ずいぶん楽しそうじゃねェか」

左脇にはさらったはずの少女を抱えて、

彼女は笑う。

こともなげに。

右脇にはサーフボー

楽しそうに。

* * *

雌雄は、すでに決していた。

ともにその途中でラガの濁流に呑み込まれ、タワー内のボクセルの海に叩きこまれていた。 みやこを攫って降りてゆくエレベータと、増援部隊を積んで昇ってくるはずの部隊は、

そのかわりに到着したエレベータから現れたのは、 ラガと、虯の配下たちである。

その力を全力で振るうラガに、 数のうえで勝るはずの部隊は、 なすすべもなく沈められ

ていった。

「さァて、と」

右腕にまとわせた濁流を巨大な腕に変えて男を持ち上げたラガは思案する。

「とりあえず目的はわかった。が、さてどうしたもんかね」

「愚かなガキだ」

背広をつままれ、 ぷらぷらと宙に浮かせた無様な姿をさらしながらも、 男は冷静な表情

を崩さない。

「これで貴様らは、 明確に政府に敵対したことになる。 貴様らの先代どもが 交わした不可

侵協定もこれで終わりだ。本格的に貴様らの排除に動くことになるだろう」

「もともとそのつもりだったんだろーが」

傲岸に言う男の顔に全力の拳を浴びせて、 ラガは鼻息を吹いた。 「上等だよ。 そっちが

ってきた喧嘩なら、喜んで買ってやるぜ」

「でも……」と、おずおずと返す声。救出されたみやこだった。

「きっと世間は、こっちが先に攻撃をしたと思うでしょうね」

そう言って目を伏せ、 うつむく。「ごめんなさい。 私がここに来たばかり

「アホかてめェは」と、ラガは少女の頭を小突く。

「お前っていうストッパ ーがいなけりや、 問答無用で不意打ちをカマされてたってことだ

ろうが。 むしろお手柄だぜ。 ……あのバカに依頼した政府の奴もな」

目線の先には、 手足がもげたまま、 手下に命じてアクリル詰めの脳を手入れさせる虯

姿があった。

「そこに吹き残しがあるだろうが。 もっと良く見ろバ 力野郎。 ああ……玉……ここにも小

さな傷が……家に帰ったらちゃんと修理をしような……。 おいてめェ ! 誰がそこまで顔

を近づけていいって言った! 殺すぞ!」

「クール気取ってるが、 あい つは単なるシスコンだ。 『妹』さえ取り戻せりや、 おめえにこ

れ以上なにもしねえだろ。……って、おいおい」

止める間もなく、虯にすたすたと近づいていくみやこ。部下たちが振り返り威嚇するが

意に介す様子もない。

「……妹さんのため、だったんですね」

虯はゆっくりと、無表情でみやこを見る。

「だったらなんだ? 失せろ」

「生き返らせたいんですか?」

虯の目が血走り、その額に血管が浮いた。「玉は死んでねえよ」

そうかもですけど」みやこは、 意に介さない。「だったらせめて、 体とか作っ

てあげたら、いいんじゃないでしょうか」

「……あア?」

激昂した虯が、 体が動かないのも構わずみやこに向けて身を乗り出した。

「んだア? てめえ……体が作れてりゃ、 そうしてるんだっつうんだよ」

「えっと、作れますけど……」

みやこは右耳のピアスに触れ、ついでそのまま、地面に触れる。

青い渦が地面に奔り――人の形を成していく。

ラガが目を見開く。「てめェ、あたしと同じことできんのか」

「ううん、 ラガさんみたいに大規模なのは無理だけど。 でもこのくらいなら」

やがて地面に、少女の姿をした義体が現れた。

「これなら、どうですか? あの、 もちろん、 顔とかは自由に作れなおせますけど……」

言葉を失った虯に対して、みやこは慌てて付け足す。

もちろんいまのままじゃだめですよ! 欠損とか劣化したぶぶんをうまく再生しな

きやい けない し、そのためにはちょっといろいろと必要なものがあるんですけど……でも、

ほら、時間さえあればまた違うかなって」

唖然としていたラガは、 わたわたと慌てるみやこと、まだ硬直している虯を見比べる。

―あんな精度の操作、あたしどころか誰にもできねェぞ。

みやこと出会った日、 ラガがスラムから見つめ てい たの は 『ネフィリ ノムの指し が来ると

われている方角だった。

1

ずっとあこがれていた。

翼人の技術

不死の力。

この屋上の世界で、 すべてを欲しいにしてきたラガにとっても、 未知なるもの。

欲しい。

笑いながらひとり夜空を見上げるラガの目は、 獰猛に光っていた。